22PO-pm398

佐原のオガワ薬局の保存資料からみた第二次世界大戦中のペニシリン製造

○石毛 久美子[1], 小川 裕好[2], 松﨑 桂一[1]（[1]日本大薬，[2]オガワ薬局）

ペニシリンは、ベンジルペニシリンとして、1942 年に実用化後、第二次世界大戦（以下、大戦）中に多くの負傷兵や戦傷者を感染症から救った薬物である。また、その後の抗菌薬開発の基礎となった化合物であり、薬学史において、重要な薬物である。我が国においても、大戦中に製造が開始され、その経緯がいくつかの刊行物にもまとめられてきた。一方で、最近になって貴重な資料が見つかることも事実である。本発表では、千葉県香取市佐原のオガワ薬局に保管されていた「ペニシリン Penicillin（碧素）ニ就テ　千葉陸軍病院（現・独立行政法人国立病院機構千葉医療センター）」（昭和 20 年（1945 年）9 月）について紹介する。

オガワ薬局は、明治 19 年に薬局を開局し、以来、現当主（小川裕好）まで 4 代続く老舗である。それ以前は、天保年間から漢方医を務めていたこともあり、薬局には、初代当主（初代・小川欽一郎）の国家試験問題をはじめとして、薬学の歴史を知る上で貴重な資料が多数保存されている。その中の 1 つが、本記録で、自らその製造にかかわった 3 代目当主（三代目・小川欽一郎、当時は小川好一陸軍少尉）が残したものである。本記録は、手書きで謄写版印刷されたものであるが、ひらがなが一切使われていないことも特徴の一つであろう。記載されている内容は、ペニシリン研究の沿革、ペニシリン産生青黴（培養法等）、ペニシリンの性状並びに保存法、作用機序、人体に対する作用（臨床応用や副作用、吸収代謝等）等、多岐にわたっており、当時のペニシリンの重要性が伝わってくる。また、現当主は、父親である 3 代目から、大戦中、ドイツからペニシリンの菌種を入手した状況等、この記録にまつわる興味深い話しを直接聞いている。発表では、資料の内容とともに現当主が 3 代目より聞いた内容についても紹介する。